

シリーズ「遺跡を学ぶ」

144

日本古代国家 建設の舞台

平城宮

渡辺晃宏

新泉社



日本古代国家 建設の舞台

―平城宮―

渡辺晃宏

【目次】

第1章 特別史跡・世界遺産「平城宮跡」……………4

- 1 遺跡としての平城宮跡……………4
 - 2 名称・形・構造……………10
 - 3 平城宮の時期区分……………14
- 〈トピック1〉国宝平城宮跡出土木簡……………17

第2章 平城宮の骨組み……………18

- 1 造営前の様相……………18
 - 2 古墳の削平と河川の付け替え……………20
 - 3 宮城門・大垣と宮内道路……………23
- 〈トピック2〉平城宮周辺の遺跡……………29

第3章 二つの中枢区画……………30

- 1 東区と中央区……………30
- 2 第一次大極殿院……………32
- 3 第二次大極殿……………38

4 内 裏……………44

5 東院地区ほか……………49

〈トピック3〉大嘗宮の発見……………56

第4章 役所域ほか……………57

- 1 南方官衙の様相……………57
 - 2 東方官衙の様相……………65
 - 3 北方官衙ほかの様相……………73
- 〈トピック4〉平城宮外にあった役所……………80

第5章 その後の平城宮……………81

- 1 平城太上天皇と平城宮……………81
 - 2 平城宮の「発見」と保存……………84
 - 3 未来の平城宮にむけて……………89
- 〈トピック5〉今後の平城宮跡……………91

参考文献……………92

編集委員

勅使河原彰(代表)

小野 昭

小野 正敏

石川日出志

小澤 毅

佐々木憲一

装 幀 新谷雅宣
本文図版 松澤利絵

第1章 特別史跡・世界遺産「平城宮跡」

1 遺跡としての平城宮跡

平城宮とは？

平城宮は、奈良の都平城京の北端に設けられた宮城で、政治・行政の中核施設である（図1・2）。その構成要素は、大極殿・朝堂院、官衙（役所）、内裏、東宮などであり、たとえば、現在の国会議事堂、霞が関の官庁街、皇居、東宮御所を合わせたような施設である。平安京では大内裏とよぶ。

平安宮については、その図面が伝来しており（図33参照）、特定の時期についてはあるが、施設配置がわかる。これに対し平城宮の構造を伝える図面は現存せず、その全体構造は発掘調査成果にもとづいて組み立てていくしかない。

これまでの調査成果によれば平城宮では奈良時代前半と後半で大きな造り替えがあり（図

3）、奈良時代後半には平安宮との類似性が認められる。換言すれば、長岡宮を通じて平安宮に受けつがれていく要素は、奈良時代後半に形成されていったことが見通せるようになってきた。奈良時代前半はそれにむけての試行錯誤の過程であったといえる。

平城宮跡の遺跡としての特徴

平城宮跡の遺跡としての特徴を整理しておこう。まず第一に、廃都後、基本的に田畑として利用され大規模に開発されることなく千年以上を経過したために、八世紀の遺跡が良好な状態、かつ発掘調査しやすい状況で守られてきたことをあげよう。それは奈良時代後半の大極殿・朝堂の基壇が、近代までその高まりを残した状態で遺存して



図1 ●平城宮跡全景（南から）

背後には、離宮松林苑が展開する奈良山丘陵が控える。それを越えれば木津川に設けられた水運の拠点泉津（いずみつ）に至り、瀬田川や淀川を通じて琵琶湖方面や難波とも直結していた。

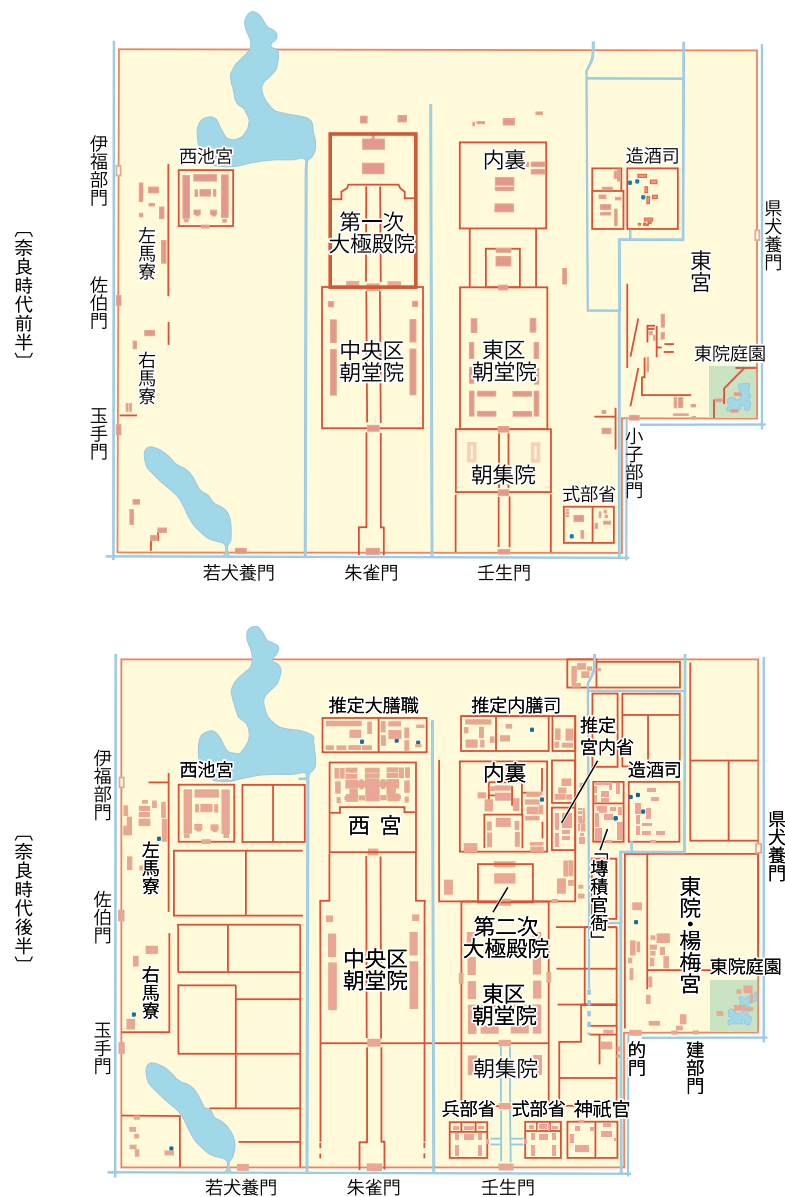


図3 ● 奈良時代前半（上）と後半（下）の平城宮
平城宮の遺構は、首都機能が離れた740年から745年までを
はさんで大きく前半と後半に分かれる。

おり、視覚的に認知されやすい状況であったことに端的にあらわされる（図4）。しかし、それだけではない。平城京の条坊の痕跡だけでなく、平城宮の役所区画の痕跡までもが、水田や畑地の地割として一二〇〇年もの間、土地に刻まれる形で残されてきていたのである（図5）。

第二に、特別史跡・世界遺産として手厚い保護の下に置かれた遺跡であることをあげよう。これはなによりも先人のためまぬ努力のたまものである。遺跡が良好な状態で残っていることと、それを知り、研究することは、そしてその保存を図ることは、また別の次元の話である。

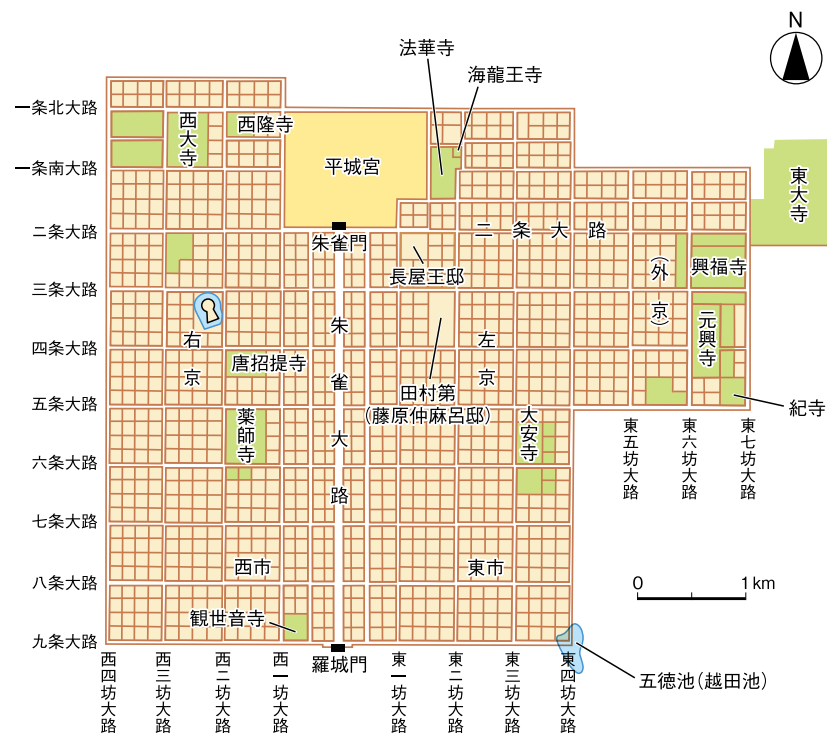


図2 ● 平城京と平城宮
平城宮は、都市平城京の北端に設けられた政治・行政の中核施設。藤原京では京の中央に宮を設けたが、平城京では唐の都長安にならって北端にあらためた。

いが、平城太上天皇が平城還都を企てた時期については記事が遺存している。このため当時の政治の舞台であった平城宮については、かなり豊富な記事が知られているわけである。ただ、『続日本紀』の編纂は最終的には平安京において完成されているから、奈良時代前半と後半とで大きな造り替えのあった平城宮の構造をどの程度理解して記事を整理したかは保証のかぎりではない。

これを補う役割をはたすのが、発掘調査によって出土する平城宮跡そのものが内包してきたさまざまな文字資料である。その存在を第四の特徴としてあげよう。出土文字資料はすなわち、遺跡・遺構の性格を決める手がかりとして重要な役割をはたす。これは平城

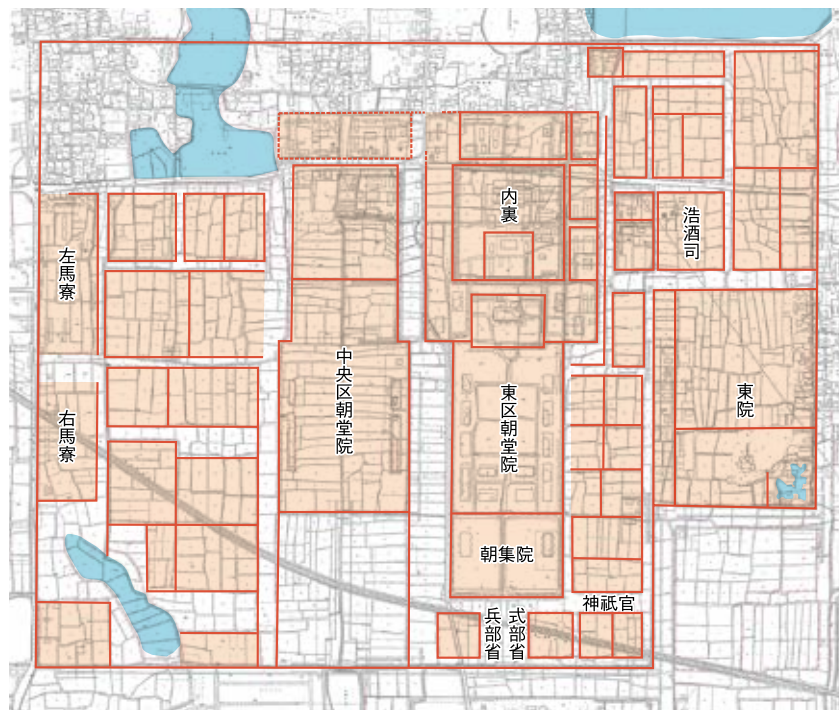


図5 ● 平城宮内の遺存地割と区画の復元
平城京内の耕作地の地割から条坊区画を復元できるのと同様に、平城宮内の地割から宮殿や役所の配置が浮かび上がる。

棚田嘉十郎・溝辺文四郎をはじめ、地元の方々の地道な平城宮址保存運動が、一九二一年の当初の史蹟指定や、現在の第二次大極殿・東区朝堂院地区を主体とする土地公有化を生みだし、国道二四号線バイパス建設や近鉄の検車区設置の計画を契機とした全国的な保存運動のうねりが、特別史蹟指定と土地公有化の拡大を生み、現在の平城宮跡の姿を形づくってきたのである。

遺跡の良好な遺存自体が奇跡的といえようが、それをさらに近代以降の大規模開発から守り抜いて来られたのもまた、これを奇蹟といわずしてなんであらう。

第三の特徴としては、遺跡に関する豊富な文献資料の存在をあげよう。平城京が首都だった時代の歴史については、国が編纂した正史である『続日本紀』がカバーしており、しかも完存している（ただし、前半は最終的な編纂時に簡略化されている）。つづく正史の『日本後紀』は散逸が多



図4 ● 第二次大極殿基壇の往時の様子（西から。1963年、岡田庄三氏撮影）
「大黒の芝」とよばれていたところを髣髴とさせる、発掘調査前の第二次大極殿の基壇跡。